

千葉大学の活動状況について

1. 千葉大学学術成果リポジトリ

千葉大学は、平成 17 年 2 月に「千葉大学学術成果リポジトリ」(CURATOR=Chiba University's Repository for Access To Outcomes of Research, <http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/>) (以下, CURATOR) の正式運用を開始した。現在, 附属図書館を中心に, 学内の協力を得ながら, 学術論文を中心に, 千葉大学内で生産された多様な研究成果の収集・発信を行っている。正式運用に至るまでの経緯と今後の計画について報告する。

2. CURATOR 誕生までの経緯

2.1 学術情報の発信に向けた図書館機能改善連絡会

近年, 学術情報発信に学術情報流通体制の整備については, 大学図書館における学術情報の収集・発信機能を強化することの必要性が各種答申等で指摘されているが, 平成 14 年 3 月の科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会情報科学技術委員会デジタル研究情報基盤ワーキング・グループ「学術情報の流通基盤の充実について(審議のまとめ)」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm) では, 大学図書館が, 学内で生産された学術情報の積極的な発信を行うほか, 学術情報発信機能の整備に関して, 総合的な企画・立案を行う機能及び発信される情報のポータル機能を担うことが求められ, これらを実施するために大学図書館が中心となって, 情報の形式, 登録方法などに関する統一的なルールについて, 学内での合意を形成し, さらには大学図書館と情報処理関連施設等が協力して情報発信のためのシステムの設計・構築を行うなど, 学術情報発信に向けて学内で主体的な役割を担う必要があることが指摘された。

一方, 国立情報学研究所(以下, NII) では, 各事業を通じて学術情報の基盤整備, 流通を進めており, これらの学術情報資源を連携させた学術情報の一元的な情報の発信窓口(ポータル機能)を整備するため, 「NII 学術コンテンツ・ポータル(GeNii)」を構築, その一環として, 大学等の情報発信機能を支援するため, 我が国の学術情報のポータルサイトとなるべく「大学情報メタデータ・ポータル(JuNii)」の構築が進められていた。

これらの動きを受け, 文部科学省では平成 14 年 5 月, 研究振興局情報課に「学術情報の発信に向けた図書館機能改善連絡会」(以下, 連絡会)を設け, 特に大学図書館における学術情報発信機能強化の観点から, 電子図書館的機能の改善に必要な取組を 15 の国立大学に促し, 各大学から改善計画が提出され, 連絡会において, 実行に向けての意見交換会を重ねた。15 大学の取り組みと連絡会における意見交換会の結果は, 15 大学以外の先進的な事例も含めて, 文部科学省研究振興局情報課から「学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について(報告書)」(平成 15 年 3 月 17 日, <http://www.soc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/kaizen.pdf>)として報告されている。

千葉大学はこの連絡会に参加し, 学術情報発信機能の改善計画として「千葉大学学術情報リポジトリ(仮称)」による研究成果の蓄積・発信, ポータル機能の高度化, 学内推進体制の整備を掲げ, プロトタイプ・システムの設計・開発に着手するとともに, 館内ワーキンググループを設置して推進体制の整備を進めることとなった。

2.2 千葉大学学術成果リポジトリ構築体制

2.2.1 合意形成に至るまでの経緯

2.2.1.1 館内ワーキングによるスタート

平成 14 年 7 月、連絡会で提示した千葉大学のビジョンを実現させるために、館内に IR (Institutional Repository) ワーキングを設置した。平成 14 年度の取り組みとしては、NII のメタデータ・データベース構築事業に参加し、7~9 月にかけて学内の Web (ホームページ) による情報発信状況を調査した。自館システム開発前だったため、公開されているサイトについての情報(メタデータ)は、NII のメタデータ・データベース構築システムにより行った。

次いで 10 月学内教員を対象に、リポジトリ構築に向けた予備調査の一環として「学術情報発信アンケート」を実施、学内で生産された電子的学術情報の現状調査を行い、その結果を図書館報(『InfoPort』No.5, 2003.1 <http://www.ii.chiba-u.ac.jp/publication/culb/infoport/005.pdf>)に報告した。回収率 27%と高いものではなかったが、コンテンツ候補の情報収集だけでなく、教員の学術情報発信に関するニーズや意識について、貴重な情報を収集できた。また、アンケートと並行して、学内の主な情報発信者を対象にヒアリングを行い、学術情報発信の実態についての情報収集も進めた。

またリポジトリを理解するために、「SPARC Institutional Repository Checklist & Resource Guide」の翻訳(「SPARC 学術機関リポジトリチェックリスト及びリソースガイド」(http://mitizane.ii.chiba-u.jp/curator/about/SPARC_IR_Checklist.pdf))を行った。

2.2.1.2 附属図書館としての取り組みへ

平成 15 年 7 月、学内有識者による「学術情報発信に関する懇談会」を開催、附属図書館が計画しているリポジトリを中心とした学術情報発信の取り組みや各部署の取り組みについての紹介、意見・情報交換を行い、システムや運用体制等の基本的な検討課題が出された。この懇談会の意見を生かし、直後の運営委員会に「学術情報発信の推進について」を提案、「千葉大学学術情報リポジトリ(仮称)」への取り組みが承認され、附属図書館に教員と事務職員から成る「学術情報発信のための協力者会議」(以下、協力者会議)を設置、本格的な運用開始に向けての準備作業に入った。当時の主な検討事項は「初期データ整備」「運用面の諸問題」「学術雑誌掲載論文の著作権について」「プロトタイプの改造」であった。(表 1 参照)

協力者会議では、3 回にわたり、運用指針(ガイドライン)と登録インターフェイスの改造を重点に置いた検討を重ね、運用指針案と利用許諾書案及びインターフェイス改造計画案をまとめた。

IR ワーキングは協力者会議と並行して検討課題に取り組み、リポジトリにおけるポリシーやシステムの先行事例調査を行い、運用指針の原案作成やシステム改善案等の実務面を担った。また学内教員にリポジトリやコンテンツ登録における著作権方針等について広く知ってもらうために、「Project RoMEO」サイトの翻訳を行い、紹介に努めた。

この他、図書館報(『InfoPort』No.7, 2003.10 <http://www.ii.chiba-u.ac.jp/publication/culb/infoport/007.pdf>)に「学術情報リポジトリ始動! - 附属図書館による学術情報の保存と発信 - 」を掲載し、学内外にリポジトリへの取り組みを宣言した。

2.2.1.3 大学公認の事業へ

平成 16 年度には、附属図書館運営委員会に学術情報発信専門委員会が設置(協力者会議を発展的解消)され、前年度に引き続き、運用指針を中心に検討、年度内正式運用を目指

表1 運用に向けた検討課題一覧

区分	課題項目	解決に向けた作業
初期データ 整備	学内のウェブサイト上で公開されているコンテンツ ・個人, 学科, 学部のサイト ・数学・情報数学科 ("Technical Reports of Mathematical Sciences, Chiba University)	・コンテンツの洗い出し ・著作権等の確認と利用許諾に関する協議 ・データ登録
	学外のサーバ上で公開されているデータ ・ arXiv.org , ADS (NASA Astrophysics Data System) 等の分野別電子論文サーバ	・コンテンツの洗い出し ・著作権等の確認と利用許諾に関する協議 ・データ登録
	既に電子化されているが,サーバ上では未公開のデータ ・自然科学研究科学学位論文 (CD-ROM 化済み)	・調査及び関係者との協議
	国立情報学研究所の紀要ポータル事業によって電子化された紀要論文 ・『千葉大学看護学部紀要』 ・『千葉大学経済研究』	・国立情報学研究所と協議の上, 電子化データ入手 ・著作権等の確認と利用許諾に関する協議 ・データ登録
	学術雑誌掲載論文	・リポジトリへの再掲を許可する出版社の調査 ・学内研究者が執筆した論文の洗い出し ・リポジトリへの登録依頼 ・データ登録
運用	ガイドラインの策定 ・登録可能な投稿者 (誰が投稿できるのか?) ・登録可能なコンテンツの種別 (論文, 教材, ソフトウェア, データセット等) ・登録可能なコンテンツの形態 (電子フォーマット) ・品質管理 ・登録解除 (削除) について	・先行事例の調査 ・原案作成と検討
	利用許諾書の策定 ・コンテンツ登録者から, 非排他的な無償の利用許諾を得る必要あり	・先行事例の調査 ・原案作成と検討
著作権	学術雑誌掲載論文の著作権 ・出版社, 学協会の著作権譲渡に関する方針についての調査	・RoMEO プロジェクトによる成果の調査 ・国内学会等のポリシーに関する調査の可能性について検討
システム	プロトタイプの改造 ・登録インターフェイス ・検索利用インターフェイス ・メタデータ要素の拡張 ・セキュリティの確保	・現状の問題点と改善すべき項目の洗い出し ・改造仕様書の策定 ・業者への発注 ・テストと検証
広報	リポジトリ計画の報知	・ウェブサイト, 館報, 学内刊行物, 業界誌, ポスター, ちらし, 各種会合, 講演会等を通じた広報活動
	マニュアル整備 (登録マニュアル, 検索・利用マニュアル)	・マニュアル作成と配布
連携協力	学内 (共同研究推進センター, 研究協力課, 国際交流課, 総合メディア基盤センター)	・「協力者会議」を通じて連携を図る
	学外 (国立情報学研究所, 他大学図書館等)	・国立情報学研究所のプロジェクトを通じて連携を図る

して協議を重ね、運用指針のほか、学術雑誌掲載論文（「Green Journal」論文）の著者最終稿（Author final version）の登録の促進、教員業績データベースとの連携への取り組みについて提案、了承された。

大学公認の事業として位置づけるため、11月に仮称だったシステム名を「千葉大学学術成果リポジトリ」(CURATOR=Chiba University's Repository for Access To Outcomes of Research)として正式名称とすることとし、協議の場を図書館から学内の情報基盤の審議を行う情報企画委員会へ移した。著作権の取り扱いについては、情報企画委員会の助言を受け、専門家や学内の知財担当部門の意見聴取を行ったことに加え、国内の状況について、平成17年1月に39学協会に対して著作権方針に関する調査を行った。回答率62%、回答の傾向は下記のとおりである。

- ・著作権の全体を学会が保有するケースが7割弱。
- ・著作者本人による掲載論文のWeb公開の認否については、意見が分かれる。方針が定まっていないケースが多い。
- ・著作権方針の調査とその結果を公開することについては7割弱が賛同。

(http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/about/local_societies_research.pdf)

情報企画委員会での審議を受け、学長説明も行いながら、2月の第4回運営委員会で「千葉大学学術成果リポジトリ運用指針」を提出・承認を得て、以後、集中的に常勤理事会、教育研究評議会、役員会といった大学の意思決定機関の承認を得て、大学公認の事業となった。ほどなく千葉大学ホームページ(<http://www.chiba-u.ac.jp/>)の「知を生かす」というメニューの一つに加えられて、大学の情報公開の一端を担っている。この間、朝日新聞の取材を受け、7月15日付千葉版に紹介記事が掲載された。また、大学本部でもリポジトリに注目、学外向け広報誌に紹介記事が掲載された。(『千葉大広報』Vol.128, 平成16年12月10日号 <http://www.chiba-u.ac.jp/message/prs/koho128/index.htm>, <http://www.chiba-u.ac.jp/message/prs/koho128/koho128.pdf>)

事業承認後、千葉大学3キャンパス(西千葉、亥鼻、松戸)においてワーキング・グループを中心に、学内説明会を開催した。

2.3 運用指針と合意形成

2.3.1 運用指針の特徴

千葉大学ではリポジトリの運用開始にあたり、「千葉大学学術成果リポジトリ運用指針」というガイドラインを用意した。これには、千葉大学学術成果リポジトリの意義、登録対象となる研究成果の要件、登録された研究成果の利用方法や著作権の取り扱い、削除方針などが示されており、CURATORの基本法といえるものである。これには「千葉大学学術成果リポジトリ登録申請書」がセットとなって配布されている。登録者(研究者)は、この申請書を提出することでCURATORの登録アカウントが発行されるが、この申請書には、図書館に対して包括的な著作物利用許諾を与える旨の内容が盛り込まれているため、研究者と図書館との間の「著作権処理」は原則として、この初回の書類提出だけで完了することとした。システムの登録の都度、同意を求める方式も考えられるが、千葉大の場合、書面での合意文書と教員の負担を考え、粗めで簡素な方式を選択した。

2.3.2 合意形成に至る過程

2.2で合意形成に至る経緯を紹介したが、簡単にまとめると図1のようになる。登録イ

ンターフェイスの改良作業の終了を待って、合意形成（運用指針のオーソライズ）を進めたこともあり、当初の原案提示（平成 15 年 10 月）から最終承認（平成 17 年 2 月）まで約 1 年半かかったが、研究担当理事等のキーパーソンへの説明を重ねたこともあり、運営委員会承認以降は大きな問題もなく、短期間のうちに大学トップの承認を得ることができた。

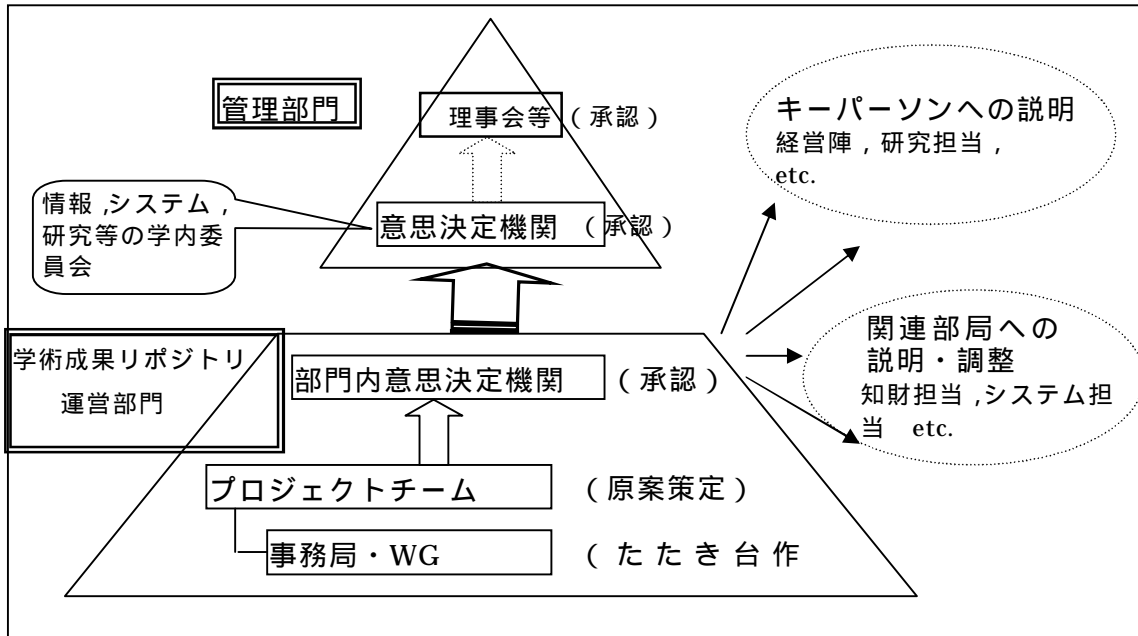


図 1 合意形成プロセス（ボトムアップ式）のモデル

2.4 システム開発とデータ整備

2.4.1 プロトタイプ・システムの開発

平成 14 年 8 月にプロトタイプ・システムの開発に着手した。当時は Dspace や E-prints といった定番ソフトウェアがなかったことから、NII のメタデータ・データベース構築システムに携わった CMS にプロトタイプの開発協力を依頼、ハードウェアは新たに専用サーバを用意した（DELL PowerEdge600SC、メモリ 1G、HD80G）。プロトタイプは平成 15 年 3 月に完成し、実用試験に入った。構成は下記のとおりである。

- ・投稿受理機能：教員・研究者自身によるコンテンツの投稿を受け付ける機能
- ・管理機能：投稿されたコンテンツのメタデータを確認し、必要に応じて、主題や件名等のメタデータの管理を行うための機能。
- ・検索機能：コンテンツに付与されたメタデータに基づいて、検索やブラウジングを行う機能
- ・メタデータ連携機能：OAI-PMH のデータ・プロバイダ機能

完成後、試行運用に入ったが、投稿受理機能は、コンテンツ 1 件ごとの入力必須項目が多いことなど、操作性の点でいくつかの問題もあり、図書館内外からの評価が芳しくなく、次期改造の最優先事項となった。また、検索機能についても、OPAC やサーチエンジン同様の検索窓を用いたもので、リポジトリに求められたショウ・ウィンドウ的要素に配慮していなかったため、改造が求められた。

しかし、当初から OAI-PMH によるハーベストを可能とするデータ・プロバイダ機能を有し、NII を始めとする多様なサービス・プロバイダとのメタデータ連携を可能とするシステムであり、平成 15 年 5 月から NII とのハーベスト実験を重ね、以後、定期的にハーベストを行うようになった。7 月には Open Archives Initiative (<http://www.openarchives.org>) にデータ・プロバイダとして登録、現在では OAIster (<http://oaister.umdl.umich.edu/o/oaister/>) にもリストアップされている。

2.4.2 プロトタイプの改造

前述のように、平成 15 年度に実用試験を開始したプロトタイプは問題点が少なくなかったため、それらを集約し、ユーザーインターフェイスを中心に改造を行うことを決め、平成 15 年末から平成 16 年 3 月にかけて、プロトタイプ・システムを開発した CMS と検討を行った。主な機能改造は下記のとおりである。

- ・投稿受理機能のユーザーインターフェイスの改善
必須入力項目、画面遷移、画面スクロールを極力抑えた簡素な新インターフェイスを開発した。必須入力項目は半分以下となった。
- ・定型データ登録インターフェイスの作成（データ一括登録の実現）
複数のコンテンツとメタデータを定型化されたファイル形式で準備し、それをまとめてサーバにアップロードする機能を追加した。
- ・検索インターフェイス改善
資源タイプ（論文、プレプリントといったリソース種別）、作成者、登録日などを指定することにより、該当するメタデータを一覧表示（ブラウジング）する機能を追加した。
- ・初期メタデータ変換機能の作成
NII の紀要電子化事業等によって作成されたデータ（メタデータ及び論文データ）をシステムに一括登録する機能を追加した。

上記のほか、英語版インターフェイスの開発やメタデータの拡張なども行った。これらの改造は平成 16 年半ばから平成 17 年初頭を通して作業が進められ、平成 17 年 3 月に当面の改造を終了した。

2.4.3 データ整備

プロトタイプ導入時は NII のメタデータ・データベース構築事業に参加した際に登録したメタデータを基礎データとしたが、その後、運営委員会の承認を得ながら、ワーキング・グループを中心に、学内コンテンツを地道に調査した。データ登録にあたっては、CURATOR の登録インターフェイスが用意されているが、教員本人による登録よりも図書館による代行登録が大半である。以下のものが代表的なものである。

- ・学内ウェブサイト上で公開されているコンテンツ
数学分野の教員に協力を得て、"Technical Reports of Mathematical Sciences, Chiba University" のデータを登録した。UNIX 標準の DVI 形式のファイルなどは、了解を取って PDF 版を図書館側で作成した。また、自著を HTML 化している文学部教員からもデータ提供を受けることが出来た。
- ・学外サーバ上で公開されているデータ
物理学分野の教員の協力を得て、arXiv.org などの分野別電子論文サーバに登録し

たデータの提供を受けた。

- ・既に電子化されているが、サーバ上では未公開のデータ
大学院自然科学研究科では一部ではあったが、学位論文をPDF化し、CD-ROMで保管していた。研究科長や学務部門の協力を得て協議を重ね、平成16年度前期分からの学位論文の登録が可能となった。
- ・NIIの「研究公開事業支援」によって電子化された紀要論文
NIIと協議し、電子化データと書誌データの提供を受けた。当初は3タイトルほどであったが、学内PRの成果によりリポジトリが浸透したこともあってか、NII事業による電子化とリポジトリへの登録を前向きに考える部局が増え、今のところコンテンツの軸となっている。
- ・学術雑誌掲載論文
二次情報データベースを活用して、本学教員の「Green Journal」論文を調査し、リポジトリへの登録依頼を行った。好意的な教員が多かったものの、「Green Journal」の登録版として多く認められている「著者最終稿 (Author Final Version)」の認知度が低く、当初は意思疎通が思うようにできなかった。また、大半の論文は、本文や図表を別々に出版社に提出し、それらを出版社が編集していく、という雑誌製作のプロセスであるため、1ファイルとしてまとめられておらず、1メタデータ1ファイル登録が前提だった改造前の登録システムには、「著者最終稿」入手のハードルが極めて高いことを痛感した。教員や図書館による「著者最終稿」編集・リポジトリへの登録といったものを模索しながら、登録を行った。(図2参照)

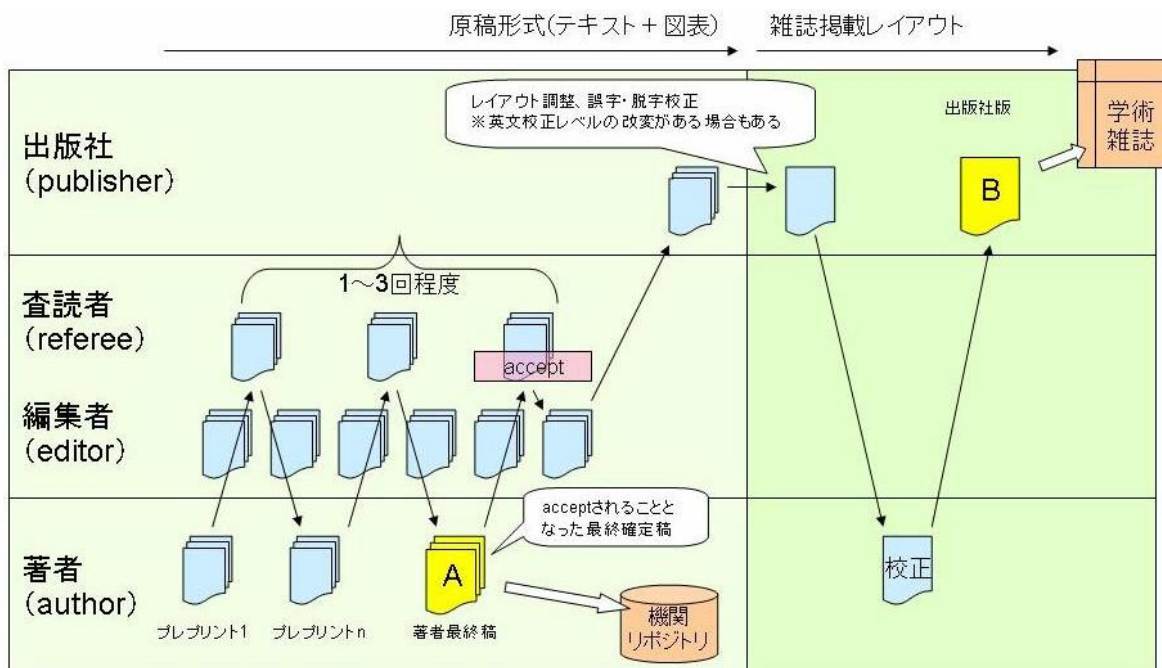


図2「編集・査読プロセスの例」参照(©北海道大学)

3. 学内外への広報活動と経験交流

3.1 学内への広報活動

3.1.1 説明会

平成17年3~4月にかけて、3キャンパスで説明会を行った。前述のように図書館報等

で PR も重ねてきたが、参加者は全体で 68 名と少なく、想像以上に関心が持たれていないことを痛感した。

3.1.2 ロゴの作成・公開

工学部デザイン工学科に CURATOR のロゴマーク作成を依頼・公開するとともに、併せてパンフレットやグッズ（クリア・ファイル）の作成・配布を行った。

3.1.3 その他

前出の図書館報、『千葉大学広報』Vol.128(2004年12月号)で CURATOR の紹介の他、『国立大学法人 千葉大学学報』第17号(平成17年6月1日)に説明会の報告、同第20号(平成17年9月1日)にはシンボルマーク（ロゴとバナー）の制定の報告を掲載した。

3.2 学外への広報活動

3.2.1 Web の活用

システム開発に合わせて Web による広報も進めてきた。「日本図書館界初のリポジトリ」ということもあって、各種の照会が相次いでいるため、情報提供も合わせて、CURATOR に関する情報は適宜 Web にアップしている。(5章参照のこと。)

3.2.2 公開シンポジウムの開催

学内外へ CURATOR の正式運用をアピールすべく、公開シンポジウム「機関リポジトリの可能性をさぐる - これからの大学における学術研究と情報発信」を平成17年9月20日に開催、9名(学内7名、学外2名)の講師による2部構成のシンポジウムは、学内外から133名の参加者を得、盛況な会となった。(<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/symposium2005.html>)

3.2.3 その他

『東京新聞』(平成16年7月15日付夕刊)と『朝日新聞』(平成17年7月14日付朝刊千葉版・京葉版)に紹介された他、図書館関係雑誌(「5.成果報告」参照)で事業紹介、『文教ニュース』で説明会(1835号、平成17年6月20日)やシンポジウム(1852号、平成17年10月17号)の報告を掲載した。

3.3 経験交流

いち早くリポジトリへの取り組みを行ったこともあり、各種のプロジェクトやワーキングに参加し、経験交流を重ねることができた。これらの活動が CURATOR の充実につながっていることは言うまでもない。主なものは下記のとおりである。

- ・NII メタデータ・データベース小委員会(平成14~15年度)
- ・学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト(NII-IRP,平成16年度)
- ・NII 最先端学術情報基盤構築事業(NII-CSI,平成17年度)
- ・国立大学図書館協会デジタルコンテンツ・プロジェクト(平成16年度~)

4. CURATOR の現在・今後の計画

4.1 システム更新・改造

千葉大学では、平成17年9月に教員の研究成果の管理や業績集の作成等の利便性を図るべく「多目的利用分散型学術成果等データベースシステム(CUFA)」を開発した。附属図書

館では仕様策定委員会にオブザーバ・メンバーとして参加し、CURATOR とのデータ連携の実現に向けて、情報提供を行ってきた。CURATOR の学内説明会においても、教員から「二度も三度も同じようなデータを作成するといった手間をかけたくない」という要望が出ており、それに応えるため、CUFA とのスムーズな連携を実現すべく、システム改造の検討を行い、先行してサーバ類の更新・ハードディスクの増設等のハードウェアの強化、それに合わせて、機能面について下記の強化を行った。

- ・セキュリティの強化
- ・一次データの複数対応（プロトタイプは1メタデータにつき1ファイルのみ対応）
- ・アクセスカウンターの設置

4.2 コンテンツ拡充

4.2.1 今後のコンテンツ候補

平成 18 年度は、学内教員の過去の科研費研究成果報告書を重点的に調査し、冊子体の提供を依頼、新たに提供が得られた大学院薬学研究院及び社会文化科学研究科の博士論文や各種研究報告書ともども、電子化とメタデータ作成をセットで外部委託し、1,151 件のデータを登録予定であり、ようやく当面の目標である 2,000 件をクリアすることとなった。

今後は CUFA から得られた学術成果情報から、教員の論文情報の入手が容易になってくると予想されるので、Green Journal の雑誌掲載論文や会議発表論文等についても積極的に取り組んでいくことになるであろう。

また、21 世紀 COE「接続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」(<http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~coe21/index.htm>)と協力し、本事業の研究成果の還元を目的とした『公共政策』(http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~coe21/results/kokyokenkyu_top.htm)をオーバレイ・ジャーナルとして提供を開始したが、学内学会の一つである千葉医学会とも、欧文誌を中心としたオーバレイ・ジャーナル創刊の試みについて意見交換を行っている。

4.2.2 代行登録へのシフト

Open Access や機関リポジトリの理想を言えば、教員・研究者自らが、登録システムのインターフェイスを通じて、セルフアーカイブを行うことであるゆえ、その改善については労力を割き、データ項目を絞った、簡易で、複数データの一括をも可能にしたものを開発し、説明会や広報等で教員への登録を呼びかけ、啓蒙活動を重ねたが、強制力もなく、直接業績評価につながらない現状では、コンテンツ登録が伸びなかった。そのため、図書館側でコンテンツ収集・代行登録というシフト転換を図り、二次情報データベースを活用しながら、教員の著作や研究業績を調査し、それらの提供を呼びかけたところ、敏感な反応があり、前項で述べたコンテンツが集まり、CURATOR 登載へとつながった。必ずしも大量にデータ収集ができるわけではないが、「活きたリポジトリ」とするためには、仕組みを作って待つのではなく、図書館側が意図的にコンテンツ集めを行っていくことが、当面は一番の近道であることを認識した。CUFA との連携による情報収集の状況を見ながらコンテンツの情報を収集し、今しばらくは代行登録を継続することになるであろう。

4.3 可視性・認知性の強化

CURATOR の有効性を高め、持続可能なシステムとしていくためには、学術コミュニティの中で CURATOR のコンテンツの可視性・認知性を高めていかなければならない。このため

エルゼビア社（本社オランダ）の学術情報検索エンジン Scirus（サイラス，<http://www.scirus.com/srsapp/aboutus/>）と共同研究を行い，日本語を含めた CURATOR のコンテンツを Scirus に登載することに成功した。この他，NII -CSI 事業参加大学と共同で，リンクリゾルバにリポジトリ・コンテンツ登載を可能とするための調査研究を行っている。

5. 成果報告

千葉大学の取り組みを報告したものは下記のとおりである。

- ・ 尾城孝一，杉田茂樹，阿籬品治夫，加藤晃一．日本における学術機関リポジトリ構築の試み：千葉大学と国立情報学研究所の事例を中心として．情報の科学と技術．54 巻 9 号，2004，p.475 -482．
- ・ 阿籬品治夫．機関リポジトリを軌道に乗せるためなすべき仕事：千葉大学の初期経験を踏まえて．情報管理．Vol.48，No.8，2004，p.496 -508．

なお，学内での PR のほか，図書館関連団体・機関の要請に応じて多数の講演・事例報告を行っている。それぞれの発表資料（パワーポイントや文書類）及び会議資料等については，下記サイトにて参照されたい。

「千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR）とは？」

<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/about.html>